

教育心理学年報第4集

りすることは、その意志決定をその主体が罪として自覚せざるを得なくなる。神を愛していると云いながら兄弟を憎む者は神に対して偽り者であると聖書は教えているが、その意味は前に述べたところからすれば、相手との現在の関係がどのような状況にあらうと神の要求している兄弟関係に復帰するように努力しなければならないと云うことである。たとえ現在に於いて相手とは仇敵の関係にあらうとも、仇敵関係なるが故に相手との関係を破棄することは神の前に許されない。そればかりかイエスは「なんじの敵を愛しなさい」「なんじの仇のために祈りなさい」と更に積極的な受容態度を求めている。

このような仇敵をも積極的に受容しなければならない高度の人間関係の要求は結局十字架を負わねばならないきびしい道として受けとらなければならない。

キリスト教会に於いて行われる研修会のTグループの中で起る各メンバーの苦悩は、他の世俗的一般のTグループに於いて経験される苦悩とは以上のことからして当然質的に違ったものであるべきであろう。即ちそれは一般的な心理的不適応な人格構造と違って、神と兄弟との「交り」への不適応な自己の態度や行動が神に対する罪責として自覚され、その罪責感に苦悩するのである。この苦悩は普通一般の心理的治療やカウンセリングで癒すことのできないもので、懺悔と適切な赦罪が与えられない

かぎり癒されない精神的な死に至ることを意味する性質のものである。

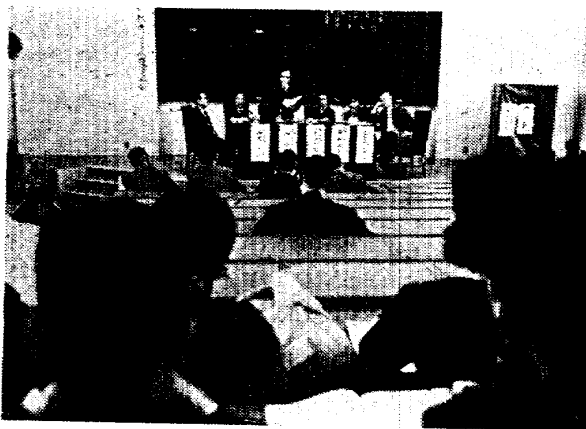
私は過去8回にわたって経験した研修会に於けるTグループのメンバーの中で強度の不適応状態に陥つた人を見てきたが、クリスチャンの場合とノンクリスチャンの場合ではその症状に於いても、その治癒の過程に於いても質的に相違しているのは、クリスチャンの人間関係の理解の仕方が、ノンクリスチャンと相違しているからだと云うことがお分りいただけると思う。

最後に一。イエスは「ふたりまたは三人がわたしの名によつて集つているところには、わたしもその中にいる」と云っているが、そのようなキリスト教の生命的な真の「交り」がクリスチャンに体験的に理解されなければならないのであるが、それにはどうすればよいか。

「小さい者の一人をつまづかせる者は、大きなひきうすを首にかけて海の深みに沈められる方がその人の益になる」とのイエスのコトバは、貧しい小さな相手との関係のきびしさを示している。このようなきびしい関係によく堪えていけるためには、正しい人間関係の改善の方法を自ら発見し、その方法に於いて遂行していける自分を作り変えることに役立つようなTグループはどのようにすべきであろうかは、なお今後に残された重要な課題である。

シンポジウム 3

教育における心理学の役割



10月5日(月) 9:00~12:00 大講堂において開催されたシンポジウムでは、

司 会 牛島 義友(九州大学)
教育原理と心理学 波多野完治(お茶の水大学)

教育技術と心理学 中野 佐三(東京教育大学)
生徒指導と心理学 沢田 慶輔(東京大学)
幼児教育・家庭教育と心理学
山下 俊郎(東京都立大学)
社会教育・青少年問題と心理学
山根 薫(埼玉大学)

による発表と討論が行なわれた。

教育原理と心理学

波多野 完 治

(1) 主人となつた奴婢

心理学と教育原理との関連を考えると、決定的なポイントは「教育目的」の問題である。むかしは、教育学や教育哲学が教育の目的を設定し、教育心理学がその目的を達成する方法を研究する、という風に考えられた。こ

の意味では、心理学的教育原理の「奴婢」(ANCILLA)であった。心理学は「道具」の科学であり、教育原理で考究され、設定された目的を、いかに実現するかに腐心すればよいのであった。

しかし、心理学が進歩するにつれて、事態はそう簡単でないことがわかってきた。

第一、教育目的は社会によつてことなるから、教育社会学が目的の考究や設定に参加せねばならぬ。すなわち教育社会学は、当初から教育的価値の問題を「事実に」研究することを余儀なくされるのであるが、このことは同時に、教育目的の設定が科学的考察の対象になりうることを、それはもはや哲学的思索のみの対象ではなくなつたことを意味する。そうして、哲学が「社会」を考慮のなかへいれてくると、教育目的のいくつかは、一ある社会の教育目的を他の社会からながめると一人間性の疎外としてあらわれていることを知る。ある社会で、人間性の「実現」とみられている目的が、他の社会では疎外とみられることになる。こういう事態は、当然、では人間性とはなにか、という問いを誘発せざるをえない。この問題にこたえるのは、心理学以外にはない。心理学が「本源の人間性」Original Nature of Man (ソーンダイク)を仮定するか、または、人間性そのものか、「社会」のなかで、社会を通してのみ実現する(ルビンシテイン)と考えるかは、議論のわかれるところであり、さまざまな方法を通じて解明されることを要する問題だが、問題そのものは、哲学の課題であるよりは、心理学の課題である。こうして、哲学は教育目的設定のために、心理学の研究結果を顧慮せざるをえなくなる。心理学はこの意味では、哲学に命令される科学ではなく、哲学に命令する科学である。

第二は、心理学のとりあつかう対象自体が「価値」である、という事情である。自然科学では、物質をとりあつかう。物質は人間に奉仕すればよいので、その意味では、それは全て手段である。手段の研究は、目的の研究に対して、奴婢であらざるをえない。人間(教育では主として子ども)も、神の僕であつたり、明治大正期の日本におけるように、天皇の「オオミタカラ」(財産)であつたりする限りでは、目的の研究は教育原理に、手段としての「人間」の形成過程は心理学に配当されてさしつかえなかつた。しかし、いまの日本では(世界どこでも同じく)人間はそれ自身目的であり、価値である。したがって人間の研究は、ある意味では「価値」の研究なのである。「発達」の心理学をこのように、価値の見地からながめようとつとめた学説をわたしは、ルビンシテ

インのほかにしらないが、しかし、暗黙のうちには、すべての児童心理学、発達心理学は発達を価値の増大の見地からながめているのである。心理学の難点は、このような価値の見地が、自然科学的研究態度や方法と調和しにくい、という点に存するので、価値の見地がよくもれなくては、心理学は本当の意味で人間を解明したとはいわれぬ。さて、このように価値の見地を心理学に入れることが当然となつてくると、それは、「教育目的」の設定に対して、いろいろの要求を出しうるものになり、哲学に命令しうるものになつてくる。

こうして、心理学が発達した今日では、それは哲学の下位に立つものではなく、対等の位置を要求するものになつた。今日では、教育目的をきめる「主人」は哲学一つではなく、多数あるとみるべきものである。心理学も社会学も、時には生理学でさえも、主人でありうるのである。心理学が「手段」の研究に終始する時代はすぎ、いまや哲学に命令し、社会学に命令することになつたのである(もちろんこのことは、同時に、心理学が哲学に命令され、社会学の命にしたがうことがあることを予想する。全ての科学の関係が教育のなかで、「平等」になつたのである)。

(2) 児童観の類型(日本の場合を中心に)

さて、このように、心理学を教育原理についての「主人公」の一人にのしあげてみると、心理学の形成する「人間像」が、教育目的に対して、大きな責任を有することを痛感せざるを得ない。これを「児童観」の問題という。児童観は、もちろん研究者としての児童心理学的教育心理学者の心に、前提として抱懷されていることが多い。つまりそれは研究の方向を決定するものである。しかし、他方、心理学のもつ研究の方法や研究の技術水準が、逆に心理学的のもちうる児童観を性格づけることも多いのであつて、ここでは、この三者(心理学者、世界観、研究法)をよりあわせながら教育目的を形成するのに力のあつた児童観を、主として日本の場合について考えてみよう。

1) 小さい大人(高島平三郎)

明治中期一後期

これは、児童心理学の発生期における児童観である。このころには、児童心理学は大人の心理学から独立していなかつた。したがって、そこで考えられた児童は、大人の心的機能を小さくしてわけもつ存在であつた。高島平三郎の明治三、四十年ごろにかいた児童心理学にそうなつている。このやり方では、教育目的は「心理学」からはでてきようがなく、教育勸語のオウムガエシになる